

対象者理解の実践
I 支援を受ける人によく見られる障害特性

2021年度のぞみの園(基礎研修会・中級編)
知的障害のある犯罪行為者への支援を学ぶ研修会

脇中 洋
大谷大学社会学部

ねらいと獲得目標

【ねらい】

- 知的障害等のある犯罪行為者のもつ特性や実情をより深く理解すること。

【到達目標】

- (1) 軽度知的障害や発達障害に関する特性や、適切な対応方法について説明できる。
- (2) 軽度知的障害や発達障害のある犯罪行為者の育ちや経験によって、もたらされる心理的特性や、適切な対応方法について説明できる。

「対象者理解の実践」の内容構成

- 基礎研修・中級編「対象者理解の実践」では対象者の特性を次の3つに分けて説明します。

1. 生まれつき持っている知的障害などの発達障害
2. 高次脳機能障害など育ちの過程で発症する障害
3. 罪を犯した人が経験を通じて独自に身に付けやすい特性

- 「Ⅰ. 支援を受ける人によく見られる障害特性」では、上記「1の発達障害の特性とその対応」について説明します。
- 「Ⅱ. 支援を受ける人の育ちや体験から来る特性」では、上記「2育ちの過程で発症する障害」と「3独自に身に付けやすい特性」を説明します。
- それらを受けた「Ⅲ. どのような関係を築くか」では、対象者との関係構築について説明します。

1.生まれつき持っている知的障害などの発達障害

—基礎編のおさらい—

- (1) 知的(能力)障害 MR, ID ← 知能全般(知的障害)
- (2) 学習障害 LD ← 特定の教科
- (3) 注意欠如・多動性障害 AD/HD ← 行動面(衝動性)
- (4) 自閉スペクトラム症 ASD ← 社会性(非定型発達)
- (5) 発達性協調運動障害 ← 粗大/微細運動(不器用さ)
- コミュニケーション障害 CD ← 吃音、社会的コミュニケーション障害

…本来、知的障害も発達障害の一種だが、

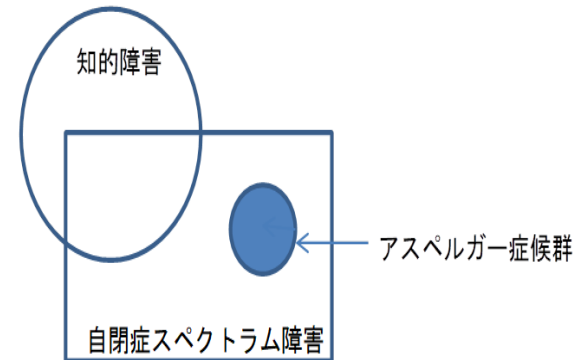
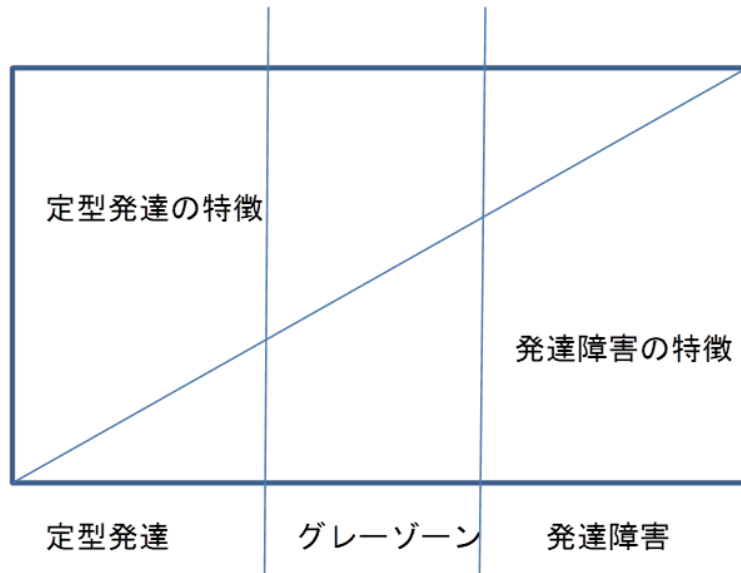
「知的障害と発達障害」の様に並列的に示されることも。

社会が求めているものに欠ける＝障害…「発達障害バブル」

発達障害の特徴

- 発達障害は、「**先天的な脳神経系の器質的障害**」とされています。
- つまり育て方の良しあしや経験によって発症するものではなく、本人の生まれながらの特性として、18歳までにその状態になっているということです。
- 全人口中に占める割合は、知的障害を除くと、多い順に**学習障害 > 注意欠如・多動性障害 > 自閉スペクトラム症**となります。
- また、それぞれの障害は**互いに重複**することもあります。たとえば自閉症と協調運動障害とか、LDとADHDなど。ただし知的障害と学習障害だけは、重なることはありません。
- また発達障害の最大の特性と言っても良いのは、次のスライドのように、「**連続性を持った概念**」ということかもしれません。

発達障害はグレーゾーンがつきもの



...健全児と連続性を持った概念

「どこか自分に似ているところがある」

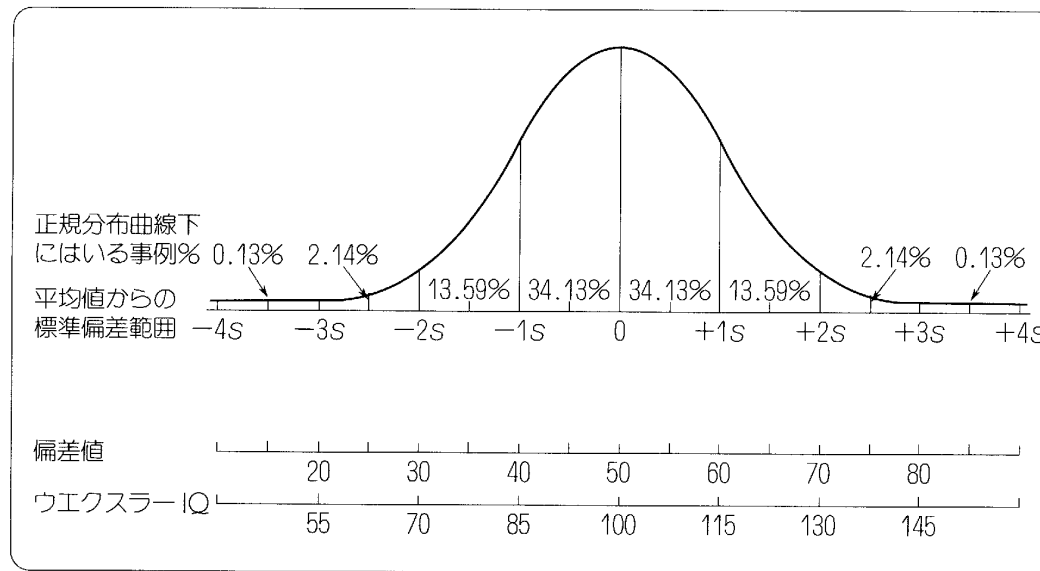
診断名を求めるよりも、特性の理解を

- 発達障害にはグレーゾーンが付きもので、境目がはっきりしないということが、なぜ特徴的かということ、例えばダウン症(23トリソミー)と比較すると明らかです。
- ダウン症とは染色体異常の一つで、当事者の細胞一つ(例えば髪の毛一本)取ってみさえすれば、診断をはっきりつけることができます。
- それに対して発達障害とは、**白黒明確な診断を付けるのがきわめて困難**なのです。
- その一方で、そうした特徴を持つ人が身近に見受けられたり、自分自身にも似た面があったりするので、想像がしやすいかもしれません。
- 医師による診断ではない場合には、確定診断ではなく「〇〇障害の疑い」という表記を見かけるかもしれません。
- しかし、この当事者は「〇〇障害だろうか」と診断について考えるよりも、「△△さんは、～という傾向があるようだ」と**具体的な特性を知ろうとする方が、ずっと建設的**です。

(1) 知的障害の定義と分類

- 知的障害(精神発達遅滞)とは、
 - (1) 知能指数がおおむね70に満たず、
 - (2) 社会的不適応の状態にあり、
 - (3) そうした状態に満18歳までになっていること
- したがって、IQ<70でも社会的適応が良好ならば知的障害の診断を受けないこともありうる。
- 18歳以上で上記の状態像を呈しても知的障害とは言わず、たとえば脳損傷による記憶能力障害や認知症といった診断になる。
- 知的障害は発達障害の一種だが、自閉症に代表される発達障害(非定型発達)と対比的に述べられることもあるので注意。
- また法律・福祉・教育領域の行政用語としては「知的障害」と言いますが、医学・心理学用語では「精神発達遅滞」(mental retardation)を用いることがあります。

知的障害の定義は、 知能指数によるものだけではない。



正規分布の標準偏差とIQ

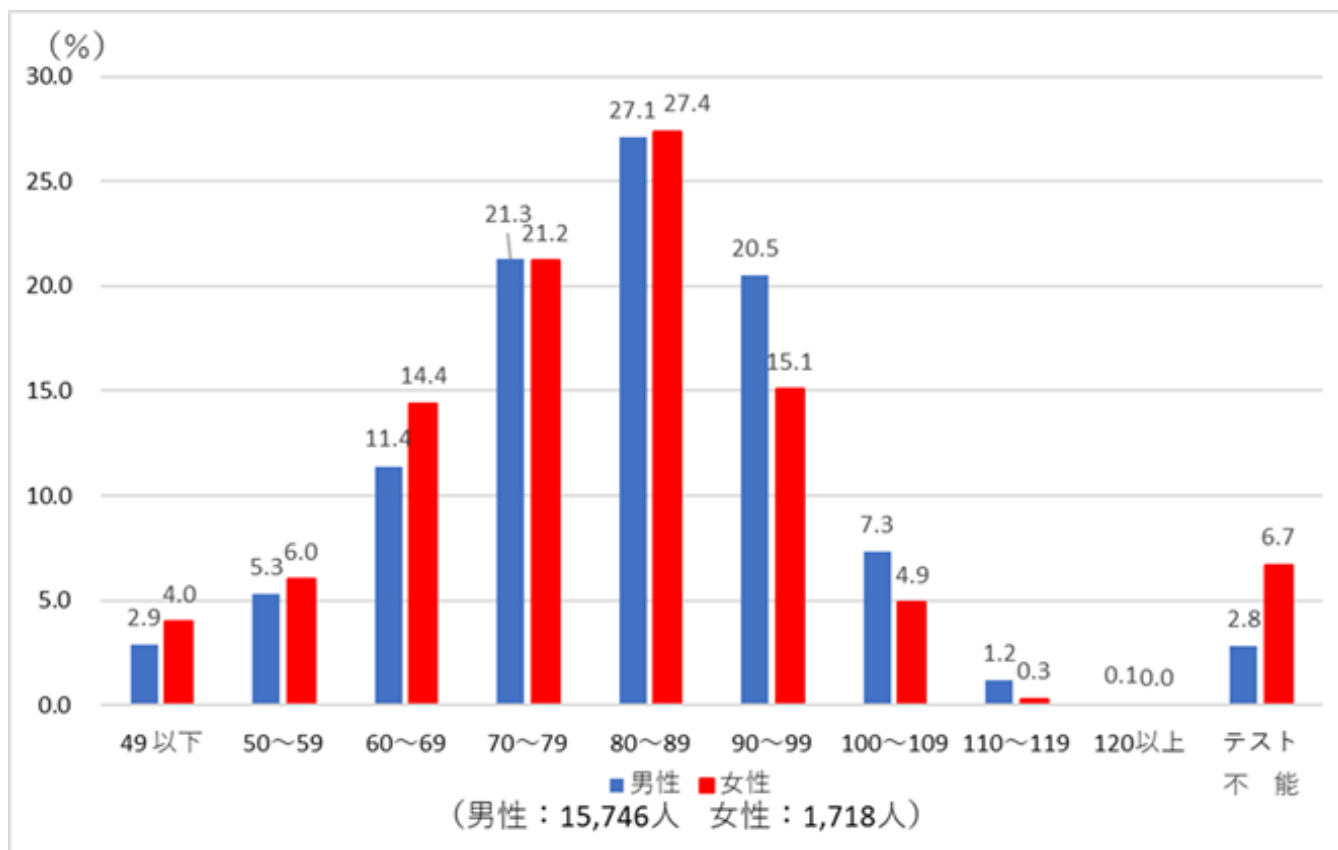
精神遅滞とは「知的機能と適応スキルの両方が制限されている状態」
「知能」が高いか低いかだけでなく、「生きる力」がどれだけあるかで判断。

知的障害 = (IQ < 70) + 社会的不適応

知的障害の程度

レベル	知能指数	発達年齢	支援	全体比	知的障害比
正常域	IQ86～	↓成人で	—	84.14%	—
境界線級	IQ71～85	DA13歳～ 形式的操作	—	13.59%	—
軽度	IQ50～70	DA9～12歳 具体的操作	一時的支援	(軽・中度 併せて↓)	85%
中度	IQ35～49	DA6～9歳 直観的思考	限定的支援	2.14%	10%
重度	IQ20～34	DA3～6歳 前概念的	長期的支援	(重・最重度 併せて↓)	3～4%
最重度	～IQ19	DA3歳未満 感覚運動的	全面的支援	0.13%	1～2%

矯正施設新規入所者のIQ相当値の分布 (2019年矯正統計年報より)



出典：古屋ほか（2021）「矯正施設を退所した知的障害等のある女性の地域生活支援の枠組みに関する研究」『国立のぞみの園紀要』14, 54-71.

知的障害の認知的特性

- **抽象的な概念**が分からない
→ **具体的な対象**ならば理解できる。
- 類似した内容を**一般化**しづらい(応用が利かない)
→ **ひとつ一つ個別に説明**すれば理解できる。
- **短期記憶**能力が弱い
→ **一度に多くの内容を伝え**ないようにする。
- **推論能力**が弱い
…**未経験・初めての出来事**には、対応が困難で戸惑う。
→ **経験したこと**についてはこなすことができる。
- 分からなくても分かったふりをする(せざるを得ない)
= **未理解同調性**
→ **理解の確認のためは、対象者の言葉**で説明する/してもらう。

(2) 学習障害 (learning disability)

- LDと表記されます。以下のいずれか、あるいは複数に障害。
- **読書障害や書字障害**
 - …文字を読んだり、書いたりすることが苦手。左右の識別が困難。
 - スリットを用いると読みやすくなることも。
- **計算障害**
 - …数字を扱うこと、計算が苦手。
- **空間認知の障害**
 - …建物内でも迷ってしまう。
 - 外出支援をていねいに。
- **推論機能の障害**
 - …合理的な解決策を思いつかずに行き詰まり、危険な方法や衝動的手段に出やすい。
- 知的障害とは異なり、特定の領域(教科)に限定される。
- 自尊心を傷つけずに情報を分かりやすく伝える工夫を。

(3) 注意欠如/多動性障害

(attention deficit/hyper activity disorder)

- AD/HDと表記されることも多く、**注意**の障害と**行動**面に問題が表出します。
 - 私たちは、複数の注意を同時並行的に維持しながら、一つのまとまりある行動を完遂させます(大げさな言い方ですが)。
 - ところが行動の途中で注意が他の対象に**転導**してしまったり、一方に気が向いて他方がお留守になったりすると、最後までまとまりある行動を成し遂げることが出来ません。
 - あるいは目の前の行動の手を止めてぼんやりと空想に浸っていると、まとまりある行動が取れません(**不注意優勢型**)。
 - また対象が目に入ると、立ち止まって考えることなく衝動的に動いてしまうこともあります(**衝動優勢型**)。
- 周囲を整頓し、雑音など気が散りやすい対象を取り除いて、単一のゴールを提示すると、比較的集中しやすくなります。
- 情報を伝えるときには、図示して整理したり、簡潔な説明を心がけましょう。
- **順番を待ちきれない、会話に割り込む**場合など、**サインを決める**などすると、次第に自ら気付けるようになります。

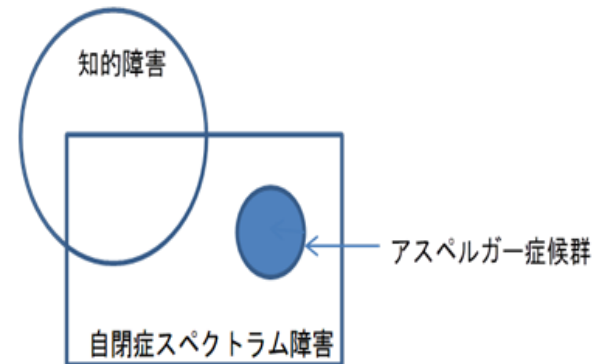
AD/HDは覚醒水準が高いのか？ それとも低いのか？

- AD/HDは覚醒水準が高いから目まぐるしく動き回っているような印象があります。
- しかし逆に覚醒水準が低いために、**動くことで覚醒水準を高めている**と言われていています。
- 子どもが夜更けてからはしゃぐ様子を想像してみてください。
- もう眠たくて、立っていても寝てしまいそうな状態だからこそ、はしゃいでいると考えられます。
- AD/HDの場合も、覚醒水準を高める方向の投薬によって、行動が落ち着くことがあります。
- 適切な注意の維持が困難なことによって、これまでも多くの失敗を重ね、**二次的にうつ状態**になっていたり、**自己効力感・自己肯定感が低下**していることがあり、その結果、**自暴自棄な行動**に出ることもあります。

(4) 自閉スペクトラム症

(Autism Spectrum Disorder: ASD)

- 自閉スペクトラム症とは、**社会的交流およびコミュニケーションの障害・反復常同的な行動様式**・ならびにしばしば**知的能力障害**を伴う**不均一な知的発達**を特徴とする、神経発達障害の1つ。症状は小児期早期(生後30か月まで)に始まる。
- 「スペクトラム」と表記されている通り、こうした特徴が強く出ている人とあまり目立たない人が居ますが、生活に支障をきたして福祉・医療的支援が必要となります。
- 他の障害と同様に、重篤なほど早期に発見・診断され、軽度の場合は成人期以降に診断されることもあります。
- 知的障害(言語発達遅滞)を伴うケースと伴わないケースがあり、後者は「高機能自閉症」「アスペルガー障害」と診断されます。
- 「発達にデコボコがある」と言われることが多く、認知機能の一部に優れていることがあります(視覚優位、カレンダー記憶など)。



ASDの有無による対応の違い

	基本的手法	教師の姿勢	コミュニケーション指導	「特別」の受け止め方	曖昧さの受け取り方
知的障害	言語ベースの指導、情緒的ふれあい	情愛豊か、熱血な姿勢	実生活を通じた指導が可能	特別な行事や意外性を楽しむ	期待して待てる
自閉症	視覚的支援 絵カード、 写真、記号	あっさり、 すっきりを 好む	意図的な場面設定が必要	特別なイベントや意外性は混乱をもたらす	不安を抱く

ASDの有無による学習方法の違い

	物事の理解の仕方	見通しの立て方	学習の進め方	適切な学習環境
知的障害	「意味」から理解	大まかな全体像で理解	「みんなと一緒に」 一斉学習	賑やかな 楽しい雰囲気
自閉症	「マッチング」 「パターン」による理解	スケジュール や末梢部分から理解	個別指導 (みんなと一緒に は苦手)	静かな環境 シンプルで分 かりやすい 環境整備

ASDの認知的特性

- 他人の**感情表現**が理解しにくい(自分から感情を言葉で表現することが難しい)
 - …相手の気持ちを汲んだり、自分から表現することが苦手
- **婉曲な表現や冗談**が通じにくい(具体的に伝える)
 - …「いい加減にしなさい」(良い加減?)
- **視覚優位**なことがある(カレンダー記憶など)
 - …メモで示したり、目で見てわかる工夫を。
- **感覚の過敏さ**
 - …甲高い声や掃除機などの大きな音、皮膚の感触を嫌がることもある。
- スケジュールなど自分の**行動様式が変わる**ことを嫌がる。
 - …初めての場所や突然の変更は混乱しやすい。
いつも通りの決まった行動を守りたい。自由行動は苦手。

(5) 発達性協調運動障害

- 運動面での極端な不器用さ
- **粗大運動**
 - …全身運動がぎこちない。手と足、左右で異なる動作が協調しづらい。
- **微細運動**
 - …指先の細かい操作。食事をよくこぼしたり、枠の中に書字が収まらないなど。
- 他の発達障害と重複していることがしばしばある。

わがままや努力不足と誤解しないで

- 生得的な障害特性(障害疑い)に関しては、その程度を丁寧に把握しましょう。
- 軽度の障害(障害疑い)の場合は、失敗を繰り返しつつ本人も「頑張らなくてはならない」と認識していることがしばしばあります。
- しかし対象者のそうした態度に乗っかって、叱ったり反省をさせて、努力で克服しようとする、さらに失敗を繰り返すことになります。
- 障害による失敗は経験不足や努力不足ではなく、対象者がもともと持っている特性ですから、基本的には環境や対応を変えて、適切な支援をする必要があります。
- 対象者ととともに(適切な支援があれば)「うまくできる」経験を積み重ねることを目指したいものです。

状況が理解できないと…2次的障害へ

- 不安、怯え、緊張が解消されないまま、
- 自分に自信が無い状態のまま、
- 失敗を乗り越えずに、再び挫折を繰り返す
→ どうせやっても無駄だろうと、学習性無力感が深まっていく。
- 身を守るためにより防衛的になる。
- 「またやられるかもしれない」と被害念慮を強める。
- 対等な関係を経験していない
→ 「やるか、やられるか」の(支配-被支配・服従)関係へ。
- 他人が信頼できない(また裏切られるかも)
→ こうした様子を見て、支援者もまた、対象者への失望「がっかり」や、不信「どうせダメなのでは」を抱いてしまいがち。

発達障害全般に、こんな質問は答えづらい

- 答えやすいのは、「はい」「いいえ」で答えられる形式（クローズド・クエスチョン：CQ）…「カレーを食べたい？」→「うん」「食べたくない」
- しかしCQだと当事者の真意ではないことがある（誘導になりがち）…「カレー好きでしょう？」→「うん」（本当はハンバーグが良かったということも）
- 「はい」「いいえ」で答えさせず自発的に語らせるオープン・クエスチョン（OQ）は、回答を引き出すのに手間取るものの、真意が引き出せる…「何が食べたいの？」「…う～ん」（選択肢を数多く用意するとか、以前の経験を例に挙げるなど）
- 答えやすい疑問詞＝「何」「誰」「いつ」「どこ」
- 答えにくい疑問詞＝「どんなふうに」「なぜ」「どうして」